

令和3年度特色入試問題

《文学部》

「学びの設計書」に関連する論述試験

「学びの設計書に関連する論述試験及び提出書類」についてA～Cの3段階評価

(注 意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに4ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに2ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別に下書き用紙2枚を配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の文章を読み、筆者の見解および学びの設計書の内容をふまえ、「人はなぜ学ばなければならないか」という問いに対するあなたの考えを述べなさい。(800字以内)

人は、なぜ勉強しなければならないのか。一つは思考力をつちかうために、と私は今いったが、実は、この問いに対する答えは私にもわからない。わからないなりに勉強してきたというのが本音である。だが、学生諸君からそんな質問を受けるたびに、いつも答える言葉がある。私はここで、それに触れておきたい。

人間の頭脳は、過去の出来事だけではなく、過去に得た知識をも、きれいさっぱり忘れてしまうようにできている。ものを忘れる能力、これはコンピューターやロボットにはない人間の長所、あるいは短所といえるだろう。

忘却という人間特有のこの能力が、長所となって現れる場合はずいぶんある。例えば、日常生活を営んでいく上で何ら支障をきたさない^{さまつ}瑣末なことが記憶から去らなかつたり、いやな出来事、腹立たしいことなどが忘れられなかつたら、人はまず確実に神経がまいてしまう。してみれば、ものを忘れることができるという人間の能力は、この点ではまことに尊い能力だといえるわけである。

では、この能力が短所となって現れる場合は、どういう場合だろうか。例えば、高校で勉強して得た知識を、大学入試に合格すると間もなく忘れてしまう。また、大学で学んだことを、めでたく就職すると忘れてたり、あるいは国家試験に向けて汗水流して覚え込んだ知識を、ライセンスを取得するとどこかへやっってしまう。このようなことは、一見、人間の忘れる能力が短所となって現れる例といえそうである。

そこで問題は、勉強してもどうせ忘れてしまうものをなぜ苦勞して勉強しなければならないか、ということになる。

私は、学生からこうたずねられると、「それは知恵を身につけるためではないか」と答えることにしているのだ。つまり、学ぶことの中には知恵という、目に見えないが生きていく上に非常に大切なものがつくられていくと思うのである。この知恵がつくられる限り、学んだことを忘れることは人間の非とならない。学ぶことは、結果として無駄にはならないのだ。だから大いに学び、大いに忘れ、また学びなさい、と私は答えることにしている。

では、いったい「知恵」とは何だろうか。それはきわめてあいまいなもので容易に分析し難いものだが、ただし、人間の中のどこにそれがつくられるかは、はっきりしている。

頭脳である。してみれば、知恵は人間の頭脳の仕組みと何らかの関係をもつものではないか、こんな推論ができそうな気がする。

人間の頭脳の特性を明らかにするには、猿などの動物のそれと比べるより、やはり頭脳をもった機械、コンピューターやロボットと比較するのが、一番てっとり早いと思う。

まず私は、ものを忘れることはコンピューターやロボットなどにはない人間特有の能力だ、と前に述べた。だが、実はそれは正確ないい方ではないのである。人間の頭脳には百四十億の神経細胞があって、出来事や知識を無数に蓄積できるようになっているし、事実、蓄積されているのだ。ただコンピューターは記憶したことを自由自在に百パーセント取り出すことができるのに対して、人間の脳は、記憶したことをほんのわずかしかり出すことができない、という相違にすぎない。ともあれ、脳に無数の情報を蓄積しているのは厳然とした事実なのである。つまり人間は「忘れる」のではなく、「脳に蓄積し取り出せない状態にする」能力をもつといったほうが正確な表現といえる。

私はこれを、コンピューターなどにはない、人間の脳のみが有する「ゆとり」だと思う。私がおの場合に使った「ゆとり」は数学的な意味での「ゆとり」である。すなわち、わずかしかり出せない「いつでもすぐ取り出せる」情報に対比して、実は膨大な量の情報が「すぐ取り出せない」形で脳に蓄積されているという、後者の前者に対する比率の大きさを「ゆとり」ということにしている。

人間の頭脳にあるこの「ゆとり」が、実は知恵というものをつくる要素の一つなのだ。

ここで一つの例をあげる。今かりに、ある文科系の大学生が卒業論文を書く上で、どうしても高校生の頃に習った数学の因数分解を用いなければならない必要が生じたとする。ところが、彼は文科系の学問ばかりしてきたために、いつのまにかすっかり数学の因数分解を忘れてしまっている。どうするか。彼はおそらく図書館に直行して調べるか、理科系の友人にたずねてみるか、何らかの手段を講じるに違いない。そして、そのようにちょっとした労をとった彼は、すぐに「ああ、なるほど」とうなずくことができるに違いない。なぜかというと、彼の頭の中には高校時代に習った因数分解の基礎的な知識が蓄積され眠っているからだ。それゆえ、一度も数学を勉強したことのない人ならば理解するのに長い時間と労力を要するところを、彼は短時間でさほど苦勞せずに理解できるのである。

このように、頭脳に蓄積され取り出せない状態にされていた知識は、永遠に取り出せないものではなく、ちょっとした手間ときっかけをつくれれば、容易に取り出すことができるのだ。人間の頭脳に「ゆとり」があるからこそ、それが可能なのである。

知恵とは、一つはこのような側面をもったものだと思う。私はこれを「知恵の広さ」と呼ぶことにしている。この「知恵の広さ」は勉強しては忘れ、また

勉強しては忘れていくうちに、自然と脳の中につちかわれていくのである。

知恵がつくられる場所である人間の頭脳は、また、コンピューターなどと違って、物事を幅をもってみつめ、考えることができるようにできている。つまり寛容な思考態度をとることが人間にはできるのだ。

例えば、コンピューターに映画を見させても、彼は鑑賞することができない。なぜなら、一つ一つのコマがバラバラな画面に見え、そこにある連続した動きがコンピューターには見えないからだ。ところが人間は、一つのコマを見てイメージをはっきり残し、次のコマへ移るまでのきわめて短い間を無視し、前のコマのイメージを持続させて次のコマのイメージと重ねることができる。これは人間の脳がある時は敏感に働き、ある時は鈍感に働き、また刺激に対する反応の余韻を残すという特性をもっているからだ。ともかくも、人間はそのような不連続なものから連続したものを読みとる能力をもっているのだ。

人間の頭脳にあるこの寛容性は、ものを考える上でも発揮される。その一つは連想である。

文章、特に詩とか格言のようなものを読む時、その中の言葉から連想される異なった言葉を、思いつくまま列記しておくとする。列記された言葉のいくつかを組み合わせて新しい文章をつくってみる。こうしたあとで、もう一度、元の文章を読み直すと、意味の理解が深みと新鮮さをもつものだ。連想は、言葉の意味と感じに幅をもたせてみるという脳の寛容性から生まれる。

また連想の習慣は、いくつかの異なるものの間に共通点を読みとる脳の働きにもつながる。数学の簡単な例でいうと、円と三角形の共通点は、平面を内側と外側の二つに分割するという性質である。コの字には、この性質はない。8の字は、平面を三つに分割する。実際生活でも、議論をまとめる時に、異なった意見の共通点を発見する能力は大変有用である。

このように、人がものを考える時は幅をもった考え方をするものであり、またそれこそ、思考は発展性をもって深まっていくのだ。

私は、人生には深くものを考えなければならない時期があり、その深い思考力をつちかうことも勉強の目的の一つだ、と前にいった。これはいいかえれば、勉強してこそつくられる「知恵の深さ」である。勉強しない人の頭脳は、人間特有の幅をもった思考のレッスンをしないから深くものを考える力、つまり「知恵の深さ」が身につかないのだ。

知恵には「広さ」があり、「深さ」があり、また「強さ」というものがある。「知恵の強さ」とは、すなわち決断力である。

私たちが人生で当面する問題には、クイズやテストのようにあらかじめ答えが用意されているものはない。クイズの問題は解答を見つけるだけの問題だが、人生の問題は、相当の時間をかけなければ問題そのものの真意もつかめないし、

到底真の解決に至らない難問ばかりである。だから、長い年月をかけて、すべてを知らなければ何の行動も起こせないという姿勢にだけ固執しては、この世は渡っていけない。

医者が、現在の医学の水準ではある病気について数パーセントしか解明されていなくても、目の前で苦しんでいる患者に何らかの診断をくださなければならない時があるように、それがいかに未解決の難問であろうと、どこかで決断しなければならないのである。飛躍しなければならないのである。

人間の頭脳は、不連続のものから連続したものを導き出す寛容性をもっている、と私はいった。いいかえれば、実は飛躍であることを飛躍でないととらえられるのが、人間の脳である。だから、人間は飛躍ができる。コンピューターやロボットには、それができない。

決断できる力、どこかでエイッと飛躍できる力。知恵のそういう「強さ」も、人生とは直接かかわらないように見える勉強を積み上げていく中で、身につけていくものなのだ。

知恵には、以上私が述べたほかにもいくつかの側面があるはずだ。いずれにせよ私は、「人はなぜ学ばなければならないか」の答えがあるとすれば、「それは知恵を身につけるためだ」と、答えるほかないのである。

(広中平祐『学問の発見 数学者が語る「考えること・学ぶこと」』講談社、2018年より。)